様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０８４７

研究課題名（和文）幼児期から児童期中期にかけての他者理解－社会的相互作用と言語的側面に着目して

研究課題名（英文）The development of social understanding: Social communication and discourse during early and middle childhood

研究代表者
岩田　美保（IWATA, Miho）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：００３３４１６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児期から児童期中期における他者理解について、幼児・児童が、家庭・園・学校場面等の社会的場面において、特に、自他の感情にどのように言及し、やりとりを行っているかに焦点を当て、観察及び分析を行った。検討内容は以下の3点であった。（１）学童を含む家族の感情会話について、会話メンバーの違いによって生じるコミュニケーションの内容の違いや多様性に着目し、分析を行った。（２）感情が語られる仲間遊びの文脈が年齢段階によってどのように変化していくかについて分析した。（３）低・高学年児童が葛藤状況での話し合いにおいて、ネガティブな感情を含む意見をどのように述べ、やりとりを行っているかについて分析した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the developmental processes of social understanding in early and middle childhood by focusing on social communication and discourse. In this study, naturally occurring emotional states verbal expressions as part of close relationships with parents, siblings, and friends from unstructured observations were gathered. In the research, we focused on:(1) family conversations at dinnertime, where family members discussed positive and negative emotions regarding practical differences and diversity;(2) practical aspects of peer play, which were rich with utterances indicative of internal emotional states;(3) the manner children spoke and interacted with classmates as well as the regulation of negative emotions during conflicts.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：他者理解　感情　コミュニケーション　社会的文脈　内的状態　社会的相互作用　談話　会話

１．研究開始当初の背景

(1)幼児期から児童期中期の社会的文脈における他者理解の検討の重要性：これまで、幼児の他者理解は実験的な検討(J.Piaget; H.Wimmer & J.Perner；子安、等)を中心に知見が積み上げられてきた。特に、1980 年代以降はいわゆる「心の理論」に関わる研究領域がその中心的な役割を担い、概ね 4 歳ごろを境に幼児の他者理解能力が高まること、さらには、児童期中期にかけて、2 次的信念の理解が可能になることが示されてきた(Wimmer & Perner,1983;Perner & Wimmer,1985; 子安,1997a,1997c,1998,等)。一方、そうした大きな変化が起こる 4 歳頃から児童期中期にかけて、他者理解能力がどのように発達していくかという連続性の観点や、実験状況ではなく、日常性の文脈において、そうした理解に関わるものとしての身近な他者との社会的相互作用がどのようになされているか、という観点をふまえた検討はまだ十分に多いとはいえない。

(2)自他の内的状態への言及を含む日常的なコミュニケーションの検討の重要性：上記(1)とも関連し、日常文脈における幼児の人の内的状態についての言及が 2 歳頃から始まることや、それらの言及と他者理解との関連が指摘されてきた (Bretherton & Beeghly,1982;Shatz,Wellman & Silber,1983 など)。近年では、そのうち、特に「感情」についての言及やそうした言及を含む他者との社会的コミュニケーションが他者理解における重要な基礎となることが今一度強調されている(Lagattuta＆Wellman, 2002；Dunn & Brophy,2005)。しかし、こうした日常文脈における「感情」等の内的状態についての言及を含むコミュニケーションに焦点化した研究は、幼児期の検討が未だ中心であり、社会的関係や社会的認知能力にも大きな変化がみられるとされる 4 歳前後以降から児童期にかけて検討した研究は非常に少ない。

(3)他者理解における言語的な側面の重要性：「心の理論」研究では、他者の行動の背後に心的なものを想定したり、心的なものを勘案して他者の行動を予測することが他者の心の理解の指標となることが示されてきた。このことは物語の中の主人公の行為やその背景となる心的状態への子どもの言及を通して幼児・児童期の他者理解を検討できる可能性を示している。こうした点はこれまで物語理解研究の領域（内田,1990,等）で部分的・間接的には検討されてきたものの、他者理解の研究領域において焦点化された検討はあまり進められていない。近年では他者理解と言語発達の関連の重要性を改めて強調する見解もみられてきており（Astington,1999,2005;内藤,2007)、子どもの他者理解の発達について、幼児期から児童期へのつながりを視野に入れ、言語的な側面および社会的相互作用の観点をふまえて調べることは極めて重要であると考えられる。

２．研究の目的

本研究の大きな目的は『幼児期から児童期中期にかけての他者理解の発達について、社会的相互作用と言語的側面に着目して調べること』である。具体的には、家庭での家族間の感情会話（感情経験についての会話を含む）や、園・小学校における幼児・児童の仲間間の感情言及を含むやりとりについて検討する。また、幼児間のやりとりでは、絵本等を介した登場人物の内的状態（特に感情）への言及を含むやりとりについても着目する。これらの検討をふまえ、幼児期から児童期中期にかけての社会的文脈における他者理解の発達過程について検討を行う。

３．研究の方法

(1)家族間の感情会話におけるやりとりについての検討：家庭での夕食時の会話において過去の感情経験についての内容を含む、感情（ポジティブ・ネガティブ感情）会話においてどのような内容が語られ、そこでのやりとりが家族メンバーの違いによりどのように異なるかに着目し、幼児・児童期の 3 人きょうだいを含む 1 家族の夕食場面の 4 年間の縦断観察データの会話内容をプロトコル化したデータに基づき分析を行った。このうち、母子間については 4 年間のデータ、父母子間及び、夕食のみ共にする機会が増えた別棟に住む祖母を含む 3 世代の会話については観察後半の 2 年間のデータに基づくものであり、それら 3 セッション間の比較は後半の 2 年のデータに基づいて行った。4 年間のきょうだいの年齢段階は長男（小 3～小 6)、長女（小 2～小 5)、次男（年中～小 2）であった。

(2)幼児の仲間遊びにおける感情言及を含むやりとりについての検討：園での自由な仲間遊びにおいて、自他の感情への言及を含むやりとりがどのような文脈でなされているかに着目し、分析を行った。首都近郊の大学附属幼稚園において、3 歳児・4 歳児・5 歳児クラスの園児を対象とし 2011 年度～2014 年度を通して観察を行った（観察は 2011 年以前から開始し、現在も継続中)。1 カ月に約 2 回、朝の自由遊び時間（約 2 時間）における室内および、屋外（一部の遊具等を中心とする）において、幼児の仲間同士のやりとりの参与観察を行った。記録は筆記記録を用い補助的に音声録音を行った。一組ごとの観察時間は 15 分間を目安とし、1 回の観察において、男女や各観察場所の観察時間がなるべくほぼ均等になるようにした。観察終了後、それぞれのデータのプロトコルを作成し、園での自他の感情についての言及が含まれた仲間遊びの文脈やそれらの遊びでのやりとり（絵本を介したやりとりを含む）の内容について検討した。

(3) 学童期の仲間間の感情言及を含むやりとりについての検討：児童が葛藤状況においてネガティブ感情を含む意見をどのように表明し、効果的な解決に向けたやりとりを行っているかに着目し、分析を行った。
①高学年学級（6 年）でのやりとり：特別活動時において数回の話し合いを経た上で設けられた、葛藤を含むテーマ「休み時間におい女児グループがアイドルグループの音楽をかけて踊ることの是非と今後の対応」に関する話し合い（40 分間）でのやりとりについて分析を行った。
②2 年・5 年の特別活動授業時における話し合いでのやりとり：話し合いのテーマは「みんなで遊ぼう」（2 年生)、「1 年生と遊ぼう」（5 年生)）であった。それぞれの学級で数回の遊びと話し合いを経た後に行われた、少人数の話し合い（2 年生はペア；5 年生は 4 名のグループ）で、特にやりとりが円滑に進まず、グループ児童に対する事後調査でも話し合いでのコミュニケーションに対する自己・他者評価のずれが大きかった 2 年・5 年の各 1 グループのやりとりを葛藤状況が生じじたやりとりと捉え、事例的検討を行った。

４．研究成果
(1)家族間の感情会話の多様性
①母子間と父母子間の感情会話の違い
家族間の感情会話のうち、重要な議論がなされやすいことが指摘される、ネガティブ感情（以下、ネガ感情とする）についての会話では，ポジティブ感情（以下、ポジ感情とする）についての会話と比べて，時期やセッション（母子間・父母子間）を通じて，感情の語彙の種類が多く，より多様な表現がなされているといえた。一方，母子間・父母子間の感情会話を比較した結果，感情に関する説明に関し、母子間では「感情（と他の心的状態と）のつながり」はネガ感情言及時に多く述べられ、父子間では、ポジ感情言及時に多く述べられているといえた。また、ポジ・ネガ感情の時制については、時期を通じて、ポジ感情は母子間では未来の発話で語られる傾向が大きいが、父母子間では小さい傾向があるといえた。他方で、ネガ感情は母子間では過去の発話で語られる傾向が大きいが、父母子間では現在の発話で語られる傾向が大きいといえた。さらに、ポジ・ネガ感情が語られたプラグマティック文脈に関し，父母子間では食事の好みやマナーなど食事に関わる会話文脈（〈食事・好み〉・〈食事・指示〉）で話される傾向が大きかったが，母子間では，自他の回想や人の内的状態に関わる会話文脈（〈コメント〉）で話される傾向が大きいといえた。
こうした結果は、異なる関係を含む日常的な家族の会話が、過去の経験だけでなく、未来や現在の感情を含む、より多様なポジ・ネガ感情や、そうした感情の因果性の理解を支える機会となり得ること、また、日常的な話者メンバーの違いにより，プラグマティックな文脈の違いが生まれ，自他の経験の回想や人の内的状態等に関わる会話だけでなく，目の前の食事の好み等に関する会話をも通じて，感情理解に重要な会話がなされていることが示唆される点で極めて重要と考えられた。一方、特に母子間では、父母子間と比べて、ネガ感情が過去についての会話文脈で話される傾向や、他の心的状態とのつながりについても述べられやすい傾向が窺えた。これについては、母子間ではネガ感情が、自他の回想や人の内的状態に関わる会話文脈において、述べられる傾向にあったこととも重なる結果であり、対象家族の平日を中心とする母子間では父母子間と比べて、感情理解において重要とされるネガ感情経験についての会話がより緊密になされていることが推察されるものといえた。この点は、先行研究（Jenkins et al. 2003,等)の報告ともほぼ合致する結果であり、今後、多数のデータを踏まえる必要はあるものの、子どもの年齢段階や会話場面の違いにもかかわらず，母子間の感情会話において，本研究の結果と欧米の知見に同様の傾向がみられる可能性を示唆するものとして重要な結果と考えられた。

②3 世代（母子間・父母子間・祖母・母子間）の感情会話の多様性
家族間のポジ・ネガ感情が語られたプラグマティック文脈は，セッション間（母子間、父母子間、祖母・母子間）で違いがみられた。〈食事・好み〉文脈では、母子間においてよりネガ感情が語られ、祖母・母子間において、よりポジ感情が語られている傾向が窺えた。〈けんか・調整〉文脈では、母子間・父母子間においてよりネガ感情が語られ、祖母・母子間においてよりポジ感情が語られている傾向が窺えた。〈楽しさ・ユーモア〉文脈では祖母・母子間においてよりポジ感情が語られ、またネガ感情言及はより少ない傾向が窺えた。〈情報・知識〉文脈では、父母子間でよりネガ感情が語られ、祖母・母子間ではよりポジ感情が語られている傾向が窺えた。こうした結果からは、特に、祖母・母子間という 3 世代の会話では、多様な文脈でポジ感情に関わる側面が強調される傾向があることが窺われるものであり、3 世代の感情会話の一特徴を示唆する結果として重要な結果と考えられた。
一方で、3 セッション間の比較の結果から、母子間では、過去の経験や出来事への言及とも大きく関わる〈コメント〉文脈でネガ感情が話される傾向が他のセッションと比べて大きいことが窺えた。これは上記①の結果も含め、母子間では他の家族メンバー間と比べて、より感情理解において重要とされるやりとりがなされていることが推察される結果ともいえ、重要と考えられた。

(2)幼児の仲間間における感情言及を含むや

りとりの文脈の変化：

①3 歳児クラスの 1 年間の変化

3 歳児クラスでは、入園間もない 1 学期（4－6 月）では、仲間遊びにおける感情言及が〈ふりの共有〉、〈遊び（ふり以外）の共有〉文脈のみであり、設定や提案に関わる文脈での言及はみられなかった。一方、園生活にも馴染んできた時期と考えられる 1 学期（6－7 月）以降では、同言及が、それらの設定・提案に関わる文脈（〈ふりの設定・提案〉、〈遊び（ふり以外）の設定・提案〉）や目の前の遊びに関わりない文脈（〈自他の感情の叙述〉）を含む仲間遊びに関わる多様な文脈でみられるようになった。さらに、3 学期では、1，2 学期と比べて、ふり以外の遊びよりも、ふり遊びに関わる文脈（〈ふりの共有〉、〈ふりの設定・提案〉）および、目の前の遊びとは直接関わらない文脈（〈自他の感情の叙述〉）が仲間遊びの中での感情言及の場として重要な意味をもってくることが示唆された。また、〈自他の感情の叙述〉文脈における感情言及については 2 学期までは、咳をした友人への声掛け（「大丈夫？」）や、遊びの開始の確認（「大丈夫？」）のようなその場に関わる言及に限られていたが、3 学期では、「ママが買ってくれたんだよ。かわいいハート（名札を友達に見せながら）」や「今日のお弁当楽しみだなー」といった、過去の経験（岩田、2012）や未来の出来事に関わる感情言及を含むやりとりもみられるようになった。こうしたことから、〈自他の感情の叙述〉文脈におけるやりとりについても 3 学期においてより多様になっていくことが示唆される点でも興味深い結果といえた。

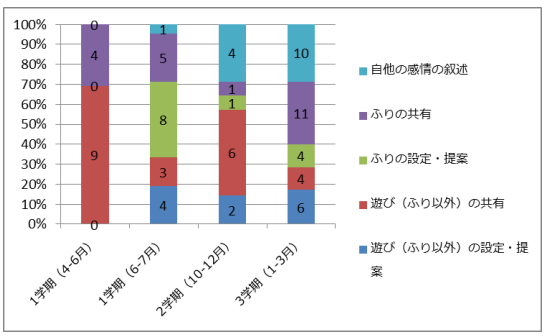

図 1．3 児クラスにおける自他の感情への言及がみられた仲間遊び文脈の 1 年間の変化
(カッコ内は言及数)

②4 歳児クラスの 1 年間の変化

4 歳児クラスでは、1 学期では〈自他の感情の叙述〉文脈及び〈ふりの共有〉文脈での言及割合が高かったが（順に 35%、26%）、特に 2，3 学期において、〈ふりの設定・提案〉文脈が占める割合が最も多くなった（順に、50%、58%）。すなわち、4 歳児クラスでは、特に 2 学期以降、ふり遊びの設定や提案などが感情言及の場として非常に重要になってくることが示唆された。特にふり遊び文脈については、自他の感情が語られる文脈として、これまで大きな焦点が当てられてきており（Hughes & Dunn,1997,等）、上述した、3 歳児クラスの 3 学期ごろからそうした遊びの共有場面で、また、4 歳児クラスの 2 学期ごろからはその設定に関わる場面でそうしたやりとりが本格化することが示唆されたことは重要な結果と考えられた。

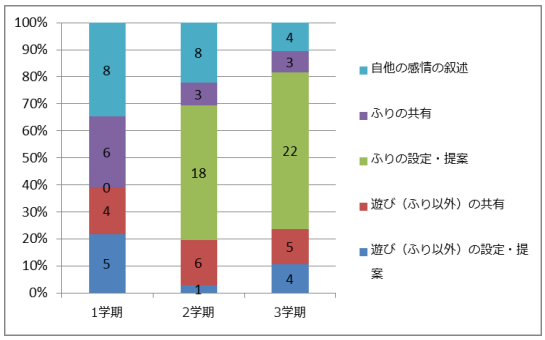

図 2. 4 児クラスにおける自他の感情への言及がみられた仲間遊び文脈の 1 年間の変化
(カッコ内は言及数)

③5 歳児クラスの 1 年間の変化

5 歳児クラスでは、1 学期では、〈ふりの共有〉、3 学期では〈遊び（ふり以外）の共有〉が最も多い 35%前後を占め、いずれも遊びが共有された状況での感情言及の高さが窺えた。一方、1～3 学期を通じて、〈遊び（ふり以外）の設定・提案〉が 30%前後を占め、特に、就学直前にあたる 3 学期では、〈遊び（ふり以外）の共有〉も含めた、ふり以外の遊びに関わる文脈での感情言及が 60%以上を占めた。他方で、上述した 4 歳児クラスの 2，3 学期にかけて高い割合(50～58%）を占めることがみられた〈ふりの設定・提案〉は、5 歳児クラスの結果においては、いずれの時期も最も割合が少なく（4～13%）、〈ふりの共有〉も 2 学期以降は、0～15%に留まった。こうした結果は、学童期移行期といえる 3 学期前後において、感情言及がなされる遊びの場がよりふりを伴わない現実場面でのやりとりになっていく可能性を示唆する結果として興味深いものといえた。

さらに、〈自他の感情の叙述〉については、1～3 学期を通じてみられ、特に 2 学期では約 55%を占めた。これについては、行事等の関係で、2 学期の遊びに関わる状況が 1，3 学期とは異なっていた可能性も考えられる。他方で、1 年間を通じて同文脈で感情言及がなされていたことは、仲間同士での目の前の遊びとは関わらない『おしゃべり』の文脈で一定の感情言及を含むやりとりが行われていることを示している。上述の通り、3 歳児クラスの 2、3 学期及び、4 歳児クラスの全学期を通じて、同文脈での感情言及が一定の割合（約 10～30%）を占めることがみられており、同文脈が幼児の仲間間の感情言及において重要であることを示唆する結果として非常に重要と考えられた。

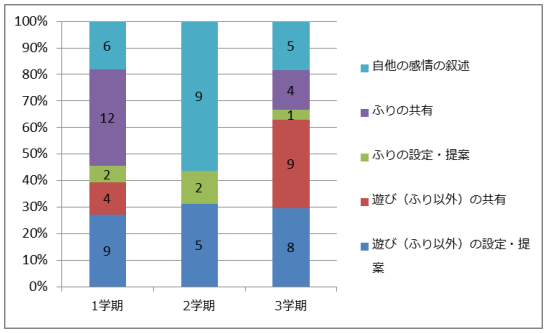

図 3. 5 児クラスにおける自他の感情への言及がみられた仲間遊び文脈の 1 年間の変化
(カッコ内は言及数)

(3) 学童期の葛藤状況での仲間間のネガティブな感情を含むやりとり：

①6 年生学級での葛藤状況での話し合いでなされた意見表明

話し合いにおける、ほぼすべての意見は当事者グループや級友に何等かの配慮を示し、自身のネガティブ感情や、葛藤を伴う意見を丁寧に述べようとしたものであった。特に今後にむけた調整的なやりとりが中心となった話し合いの中間部では、相手への受容（A）を示した形や、個人的な思いに留めた形（C）での意見表明に加えて、周りへの配慮が求められるものとして（D）、また、今後につながる具体的な提案として（E）、意見表明がなされることが一貫してみられた。これらの結果は、こうした葛藤状況の調整においてそれらの意見表明のあり方が極めて効果的であることや、高学年児童がそうした発言を用いて自己や当事者グループ、級友のネガティブ感情をふまえ、自主的に効果的な対処に結びつけていくことが可能になってきていることを示唆するものとして、感情発達の観点からも重要であると考えられた。

表１．当事者グループに対する意見表明のあり方

A「相手への受容」：「ラジカセを使うのは楽しくていいと思います。だけどあくまで学校は勉強するところだからほどほどにした方がいいと思います。
B「婉曲な表現」：「踊らないで（中略）といっているのではなく、曲がガンガンかかっていてなんかちょっと嫌なムードです」
C「個人的な思い」：「自分たちの趣味だからって変えないのは僕はどうかと思う」
D「周りへの配慮」：趣味と学校とをわきまえてもらわないと、他の踊っていない人にも支障があるのではないかと思います
E「具体的な提案」：教室全体を巻きこむのではなく、一部の空間でいいのではないでしょうか

②授業時における 5 年生グループ・2 年生ペアの葛藤状況でのやりとり

いずれの事例も、児童間で意見の相違や対立がみられる中のやりとりであった。2 年生ペアの話し合いでは、一方の児童のやや強引な発言（「島はおれが決める」等）に対し、最終的には相手への批判となり、話し合いの継続は困難となった。しかしながらそうした葛藤状況で、問題を投げかけたり（「ここだとみんなのじゃまにならない？」）、相手への譲歩（「はいはい、ちゃんと決めてね」）等、相互間の葛藤を含んだやりとりを調整するような発言もみられた。一方、話し合いの内容に関しては、2 年・5 年を通じ、一方の児童の主張する内容に対し、「より良く遊ぶ」上での、周りや第三者への配慮を含む意見が調整的に述べられる様子が窺われた。5 年生では特にそうした意見表明を明示的に行いながら、葛藤を伴う話し合いが合意的に展開していく様相がみられ、上記①の 6 年生の検討とも一部重なるところであった。こうした点については今後も検討が必要となるが、高学年期にかけての話し合いでのやりとりの一特徴が示唆される結果として重要と考えられた。

(4)総括と今後の展望

①総括：本研究の意義として、これまで焦点的な検討の少なかった、子どもの他者理解が大きく変化する幼児期から児童期にかけての時期の、家庭・学校・園といった社会的な場面における子どもの感情言及を幅広く収集し、今後につながる基礎的な分析に着手することができたことが挙げられる。

家庭の感情会話の分析では、日常的な家族メンバーの在席状況の違いにより、感情会話に多様性が生まれることが示された。これらの会話は対象となった家族の関係に大きく依存したものといえるが、母子間では他者理解に重要とされるネガティブな面が強調されること、さらに、3 世代の会話では、ポジティブな面がより協調される等、核家族間の会話とは異なる特徴がみられることが示唆されたことは重要といえる。今後は、こうした 3 世代間をも含めた、ポジ・ネガ感情に関わるやりとりの内容をさらに質的に分析することと、さらに数多くの家族を対象としたデータ分析が必要となる。

園での仲間遊びにおける感情言及の分析では、3 歳児クラスの終わりから 4 歳児クラスではこれまで他者理解との関係が指摘されてきた『ふり遊び』に関わる文脈が、感情が語られる文脈として重要となってくることが推察された。一方で、5 歳児クラスではふり以外の遊び等、『現実場面』でのやりとりが感情言及がなされる場として重要となることが窺われた。これらは、『ふり遊び』以外の仲間遊びにおいても、感情が豊富に語られている可能性や、感情が語られやすい文脈が年齢段階によって変化していく可能性、さらに 5 歳児ではふりの世界を経ずに自他の感情に関わるやりとりがより可能となる可能性等が示唆される結果として極めて重要といえる。今後は、これらの点についてさらに検証を行い、それぞれのやりとりや感情言及の内容についてより詳細に分析していくことが望まれる。現在、絵本読み場面を含む仲間同士のやりとりについて分析に着手したところである。多様なキャラクターや人物の感情言及を含んだ幼児間のやりとりについて、今後さらに詳細な分析を行う予定である。

学校場面での葛藤状況での児童の話し合いの分析では、高学年児童が、ネガ感情を含む意見を調整的に述べながらやりとりを行い、話し合いを終結させていく様子が窺えた。ネガ感情を含む自他の複雑な感情理解やそうした感情表出がより洗練されてくるとされる高学年期児童において、クラスやグループ間の話し合いの場でもそうしたやりとりが可能となることが示唆されたことは極めて興味深いことといえる。一方で、2 年生児童では、その過渡期にあることが窺えた。今後は低学年期や、ネガ感情経験への対処及び 2 次的信念の理解が深まる中学年期前後の変化をより視野に入れ、学童期全般の発達過程についてより綿密に検討を行う必要がある。
②今後の展望：今後は本研究結果をベースとしながら、幼児期から児童期中期にかけての他者理解の発達プロセスについて、感情会話とコミュニケーションの観点から、さらに発展的に検討を行う予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 4 件）
① 岩田 美保・古重 奈央・鶴島 規晃 児童間の話し合いにおいてネガティブな感情を含む意見表明がどのようになされるか：2 年生クラス及び 5 年生クラスの話し合いの事例から.千葉大学研究紀要,査読無,62,2014,129-132.
② 岩田 美保 母子 4 者間・父母子 5 者間で語られるポジティブ・ネガティブ感情：1 家族の夕食時の会話の縦断的検討.日本家政学会誌,査読有,64,2, 2013,75-88.
③ 岩田 美保・古重 奈央・鶴島 規晃 高学年学級での話し合いにおける自他の感情への言及を含むやりとり－葛藤状況に対してネガティブな感情をどのように表明するか－.千葉大学教育学部研究紀要査読無,61, 2013,163-166.
④ 岩田 美保 園での仲間遊びにおいて語られる自他の感情. 千葉大学教育学部研究紀要,査読無,60, 2012,105-108.

〔学会発表〕（計 11 件）
① 岩田 美保 園での仲間遊びにおける自他の感情言及を含むやりとり－5 歳児クラスの幼児の 1 年間のやりとり文脈の変化－, 日本発達心理学会第 25 回大会,2014 年 3 月 21 日,京都大学（京都）
② Miho Iwata Three Generations of Family Conversations about Positive and Negative Emotions at Dinner Time. The 7th conference of the International Academy of Family Psychology , 2013 年9月1日,国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）
③ 岩田 美保 園での仲間遊びにおける自他感情言及－3.4 歳児クラスでの言及文脈の 1 年の変化に着目して－. 日本教育心理学会第 55 回総会,2013 年 8 月 19 日,法政大学（東京）
④ 岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討3.日本保育学会第 66 回大会,2013 年 5 月 11 日,中村学園大学（福岡）
⑤ 岩田 美保・古重 奈央・鶴島 規晃 高学年学級の葛藤状況における話し合い－効果的な解決にむけてネガティブ感情の表明がどのようになされるか.日本発達心理学会第 24 回大会,2013 年 3 月 15 日,明治学院大学（東京）
⑥ 岩田 美保・古重 奈央・鶴島 規晃 高学年学級の話し合いにおける自他の感情への言及を含むやりとり－葛藤状況に対してネガティブな感情をどのように表明するか－.日本教育心理学会第 54 回総会,2012 年 11 月 23 日,琉球大学（沖縄）
⑦ 岩田 美保 児童期の感情理解を支えるものとしての家族の会話－一家族の異なる話者間で話されるポジ・ネガ感情の説明と時制の違い－.日本心理学会第 76 回大会,2012 年 9 月 12 日,専修大学（東京）
⑧ 岩田 美保 学童期の他者理解を支えるものとしての家族の会話－異なる家族間におけるポジ・ネガ感情が話されるプラグマティック文脈の違い－.日本家族心理学会第 29 回大会,2012 年 7 月 15 日,東京学芸大学（東京）
⑨ 岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討2.日本保育学会第 65 回大会,2012 年 5 月 5 日,東京家政大学（東京）
⑩ 岩田 美保 3 歳児クラスの幼児の仲間遊びにみる自他の感情言及を含むやりとり－新入園後 4 か月間のやりとりの変化－.日本発達心理学会第 23 回大会,2012 年 3 月 29 日,名古屋国際会議場（愛知）
⑪ 岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討.日本保育学会第 64 回大会,2011 年 5 月 5 日,玉川大学（東京）

〔図書〕（計 2 件）
① 岩田 美保（共著） 飯永 喜一郎・岩立 志津夫編 福村出版,新・発達心理学ハンドブック,（印刷中）,分担執筆箇所：VI 部・第 75 章・「基本的な研究デザイン・第 2 節・自然観察法」（全 6P）。
② 岩田 美保（共著） 小山 高正・田中みどり・福田 きよみ編 川島書店,遊びの保育発達学,2014,分担執筆箇所：「遊びと感情表現」,pp47-70.

６．研究組織
(1)研究代表者
岩田 美保（IWATA, Miho）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：００３３４１６０